#### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	資本主義精神論: サムエルスン「宗教と経済活動」を中心にして
Sub Title	Professor Samuelsson on "The protestant ethic and the spirit of capitalism
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.2 (1966. 2) ,p.187(77)- 194(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19660201-0077
Abstract	
Notes	学界展望
Genre	Journal Article
	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- (注 63 ID 二三八 椎名重明「農業における産業資本の形成 九頁参照。 とくにイギリスの 場合について -」(大塚・高橋・松田編著 『西洋経済史講座』
- ト、往 リ、64 (傍点筆者) リイ・ジェントルマンの二・三男たちとの地位の向上であったことは既に明β)(ノウルズもこれを認めて「イングランド及びウェエルズ全般にわたり、 たことは既に明白である」と述べている。 土地譲与の主要な結果が、富裕なヨーマンたちと、 (Knowles, op. cit., p. 399)
- (注66) (注65) C. Hill, Puritanism and Revolution, 1958, p. 40.

The English Yeoman under Elizabeth and the Early Stuarts, pp. 70-71.)(傍点筆者) の農業の発展を形成する手助けをし、それによって、間接的にではあるが、ヨーマン階級の成長に寄与したのであった。」(M. Campbell,たらされた。」「ヘンリィ八世は王室の利益をはかるために解散をおこなった。しかし、そうすることによって、彼は来るべき一〇〇年間 なく投機業者の手に入り、 まず大土地保有者に、贈与または諸奉仕の提供を条件として譲られるか、売却されるかしたからである。 る。 発的に知ることができるだけであるが、 「多分、ほとんどのヨー ヨーマンについては、 市場に出、そこにおいて分割・再分割され、十六世紀の終りまでには、小規模な買手の手のとどくところにも マンは、 最終的な土地受領者についての組織的検討が可能な史料がないため、個人史料について、個々の場合を単 解散後間もない年代に、修道院領の譲渡によって利益を 受けなかった。 というのは、この土地は キャンベル(M. Campbell)のように大胆な 結論を出している 場合も ある。 それは こうであ しかし、 その大部分は間も

(本稿は高村象平教授の指導の下に作製された修士論文の一部である。)

## 学 展 望

### 資 本 主義 を中心にして サムエルスン 精神 「宗教と経済活動」

勝 己

塚久雄編 「マックス・ヴェーバー研究-てわが国のヴェーバー研究の水準は飛躍的に高められた。従来のわ 治、住谷一彦、内田芳明著「マックス・ヴェーバー研究」 記念シンポジウム」が 開催された。 六五年には 大塚久雄、 安藤英 夏には『理想』 がそれぞれ マックス・ヴェーバー 会主催のシンポジウムが開催され、 を記念して、 一九六四年はマッ 六四年十二月には東京大学で「マックス・ヴェーバー生誕百年 」(東大出版会刊)が相次いで出版された。これらの研究によっ 安藤英治「マックス・ウェーバー研究」(未来社刊) わが国でも、六三年春には慶應義塾大学で経済学史学 クス・ヴェ ーバー生誕一○○年にあたり、それ 同年秋には『思想』、 - 生誕百年 シンポジウム 特輯号を 出した および大 (岩波書店 翌六四年

> を断片的・孤立的に 利用するのでは なく、「ヴェーバー的課題」を、いいの邦訳の進行とその研究が現われて来て、ヴェーバーの個々の著作 紹介・利用されていたが、近年は「支配の社会学」と「宗教社会学」あらわれてきた。社会経済史系列の著作は、わが国でも比較的早く 全体として受けとめようとする 方向に 進みつつ あるように 思われ して、 に、方法論の適用形態を、否、 が国のヴェーバー研究が科学方法論を、 とりあげて来たのに対して、 方法自体を見て行こうとする傾向が 近年はヴェーバーの全業績の中 しかも『客観性』 を中心に

- 注(1) 「中世商事会社史」「古代文化没落の社会的原因」「都市」「古代
- 2
- 3 「古代ユダヤ教」(1)(みすず書房刊) 倫理」Ⅱ、「ヒンズー教と仏教」(1)(みすず書房刊)、 3) 大塚久雄・生松敬三訳「世界宗教の経済倫理――12) 世良晃志郎訳「支配の社会学」(I・II、創元社刊。の農業事情」「農業制度と資本主義」など。 と道教」をはじめとして、杉浦宏訳・中村元補注「世界宗教の経済 (3)(みすず書房「みすず」 第64、65、66号)、細谷徳三郎訳「儒教

=

を探究するときに 「近代ヨーロッパの文化世界に 生を享けた者が 一般歴史的諸問題 普遍的な意義と妥当性とを発展せしめたる如き文化諸現象が、 少くとも我々は、そう考えたい処で あるが

二八七

が、以下引用して見よう。——
が、以下引用して見よう。——
が、以下引用して見よう。——
が、以下引用して見よう。——
が、以下引用して見よう。——

のに、運命は不幸にもこの外衣を鋼鉄のように堅い外枠と化せし 衣』のように聖徒の肩にかかるに止めねばならなかった。それな 外物についての配慮は、ただ『いつでも脱ぐことのできる薄い 経済的営利にたずさわる人々のみでなく――の生活をす現在その歯車装置の中に入りこんでくる一切の諸個人-ことになった。が、この世界秩序たるや、圧倒的な力をもって、 的経済組織の、あの強力な世界秩序を作り上げるのに力を添える だ中へ移され、世俗内的道徳を支配しはじめるとともに、こんど たらざるをえない。何故というに、禁欲は僧房から職業生活のた 「ピューリタンは職業人たらんと欲した。 将来もおそらく、 機械的生産の技術的・経済的条件に縛りつけられている近代 禁欲は世俗を改造し、世俗の内部で成果をあげようと試み それを決定するであろう。バックスターの見解によれば、 化石化した燃料の最後の一片が燃えつきる の生活を決定してお われわれは職業人 ー直接に 外

真理となるであろう。『精神のない専門人、 石化がおこるのか、それはまだ誰にもわからない。それはそれと ての思想や理想の力強い復活がおこるのか、それとも――その何きには、まったく新しい預言者たちが現われるのか、或いはかつに住むものが誰であるのか、そして、この巨大な発展がおわると して、こうした文化発展の『最後の人々』にとっては、次の言葉が れでもないなら の性格をおびるにいたることさえ稀ではない。将来この外枠の中 国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味をとりさられているた 通例である。今日営利のもっとも自由な地方であるアメリカ合衆 同じことだが、主観的にも端的に経済的強制としか感じられない ところでは 精神的文化価値に関連せしめられえないところでは「 あるいている。今日この『使命たる職業の遂行』が直接に最高の はかつての宗教的信仰の亡霊として、われわれの生活の中を巡り 資本主義は、機械の基礎の上に立って以来、この支柱をもう必要 としない。禁欲の朗らかな後継者たる啓蒙主義の薔薇色の雰囲気 強力となり、 ついには 逃れえない力を 人間の上に 揮うにいた たが、そのために世俗の外物はかつて歴史にその比を見ないほど た。今日では禁欲の精神は-純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果スポーツ この外枠から抜け出てしまっている。ともかく勝利をとげた 今日ではまったく 失せはてたらしく、『職業義務』の 思想 各人はその意味をおよそ詮索しようとしないのが - 一種異常な尊大さでもって粉飾され機械的化 -最終的にか否か、誰も 知らない 心情の ない 享楽人。 一或いは、

ですでに登りつめた、と自惚れるのだ』と。――」ですのに登りつめた、と自惚れるのだ』と。――」(5)

ることが出来たのである。 で、本安の源泉をなしている。彼はこのような状が人々を包みこんで、不安の源泉をなしている。彼はこのような状度の世界大戦と、新しい民族諸国家の誕生と社会主義国の成立、拡度の世界大戦と、新しい民族諸国家の誕生と社会主義国の成立、拡

かなり激しいヴェーバー批判書である。われているが、ここで紹介するサムエルスンの新著は特に異色の、かなり激く、ベンディックスの好著を始めこする秀れた研究が次々とあら強く、ベンディックスの好著を始めこする秀れた研究が次々とあら、欧米の学界では近年『プロテスタンティズムの倫理』への関心は

目を受け、我が国でもいち早く好意的評価が与えられている。や、ストックホルムの大百貨店 Nordiska Kompaniet の歴史の外、や、ストックホルムの大百貨店 Nordiska Kompaniet の歴史の外、

的達。成に向けたのは宗教(プロテスタンティズムの諸教義)であった。ユースントサムエルスンは次の様に問題を提起する。すなわち、人々を経済

というのである。というのである。というのである。というのである。というのである。というのである。というの発展に不可欠の要因でなかったのではないか、本主義」は、プロテスタンティズムなしには見られなかったのだろ本主義」は、プロテスタンティズムなしには見られなかったのだろ本主義」は、プロテスタンティズムなしには見られなかったのだろった。プロテスタントの諸国は、カトリックの諸国より経済的に成たか。プロテスタントの諸国は、カトリックの諸国より経済的に成

エーバーおよびその批判足しているに過ぎない、 、一の命題ないし問題提起を基本的に承認していて、 る、という三点に要約出来るが、これらの批判者といえどもヴェ ヴェーバーはプロテスタンティズム以外の諸要因について無知であ Kraus, Wolmer Clemmensen らの論点を簡単に紹介し、 René Welleh および Austin Warren など根本的にヴェーバーの主 Heckscher, W. Arthur Lewis, および Gunnar Myrdal. 文学史家 主義の発展の関連を誇張していて、その一般化は過度である。第二 判者の論点は、第一に、ヴェーバーはプロテスタンティズムと資本 Rachfahl, Werner Sombart, Lujo Brentano, Wm. Achley, R. 張を受容れている人々と、これに対する批判者としての Barnes, Talcott Parsons および Irwin G. Wyllie, 経済学者 Eli F. サムエルスンはまず第一章で 研究史を 回顧し、 両者の関連はヴェーバーの考えた程直接的ではない。第三に、 およびその批判者に共通の、宗教倫理と資本主義発展との H. M. Robertson, A. としてい Fanfani, W. Cunningham, J. B. る。そしてサムエルスンは、 社会学者 耳 修正ないし補 これらの批 Felix Ħ

る。関連という問題の提起の仕方そのものに根本的な疑問を表明して関連という問題の提起の仕方そのものに根本的な疑問を表明して

定説との関連は、後期カルヴァン主義神学者において見られるものを人々に与えたに過ぎない。経済的成功や職業労働のエートスと予 場合に、彼らが自他の経済活動を出来る限り宗教的に有利に解釈し ようとしたから、両者の間になんらかの関連があるかのような印象 ピューリタンの経済観は資本主義の精神を奨励もせず阻碍もしなか のである。 った。資本主義の精神は宗教的信仰から全く独立して存在し育った るという、 益あるものと看做していなかった。勤勉と節約と個人的自由とは勧 もっていたとしても、彼らは決して積極的に霊魂の教済にとって ムやルッター主義に比して改革派教会の指導者が経済問題に関心を カルヴァン自身にはそのような関連は認められない。 ただピューリタン諸教派のメンバーが経済的に成功した 経済活動に対する矛盾した態度が見られた。 その結果えられる富と成功は、霊魂にとって危険であ タニズムの精神と資本主義の精神」。カトリシズ すなわち、

やニュー・イングランドのアルミニアニズムは、宗教信仰から教育さまざまの経済的・政治的・文化的諸要因の所産である。啓蒙主義虹上の発見、アラブ諸王国などとの条約、新しい 学問中心地の 創理上の発見、アラブ諸王国などとの条約、新しい 学問中心地の 創理上の発見、アラブ諸王国などとの条約、新しい 学問中心地の 創理上の発見、アラブ諸王国などとの条約、新しい 学問中心地の 創資本主義」又は「資本主義精神」は宗教改革の ずっと 以前から「資本主義」又は「資本主義精神」は宗教改革の ずっと 以前から

「ポルトガルの商家」にも、ひとしく見られる。(ほ)頭のニュー・ヨーク、ボストン及びシカゴの金融業者」と 同 様 に 的で グランドのピューリタン奴隷商人や、一九世紀末および二〇世紀初 ネサンス諸都市の成功せる商人」にも、又「一八世紀ニュー・イン ・フランドル地方の織物業者や輸出業者」 と同様に、「イタリヤ・ル 布した「資本主義精神」を示すものである。富商ヤーコプ・フッガ 想の基調はフランクリンと根本的に相違はないし、真に「資本主義 Jacques Savaryの著書 Le parfait négociant (一六七五年)の経済思 書 I libri della Famiglia (一四五〇年) やフランスのカトリック教徒 タント諸国に広く見られたものである。 Leon Batisti Alberti の著 にのみ固有のものではなく、 ness」「平静 tranquillity」「謙虚 humility」「純潔 chastity」などの(4) において考えらるべきものである。又この種の観念はフランクリン 「真実 sincerity」「正義 justice」「中庸 moderation」「清潔 cleanli-整頓 的職業意識はもっていなかった。「節側 temperance」「沈黙 silence」 俗化時代の象徴である。彼は勤勉と節約を尊んだが、ピューリタン を解放した。ベンジャミン・フランクリンはそういう啓蒙主義と世 の有名な一句についても同様である。この営利欲は「カトリック は、ピューリタニズムではなく、啓蒙主義、 「合理的」である。またアルベルティの思想は当時の広く流 order」「決断 resolution」「倹約 frugality」「勤勉 industry」 彼以前にもカトリックおよびプロテス 功利主義との関連

ら、ニュー・ヨークの大土地投機業者、アスター John Jacob典型的"captains of industry"たるカーネギーやフォードにし

決してピューリタン的心情をもっていなかった。Astor や鉄道業者ヴァンダービルト Cornelius Vanderbiltにしても、

ックの教説にも見られた。展を助けた低利子は、プロテスタンティズムだけではなく、カトリ展を助けた低利子は、プロテスタンティズムだけではなく、カトリた徳目によって大資木が蓄積されたのではない。資本主義経済の発 第三章では「美徳・利子および富」と題して、勤勉と節約といっ

派と実業教育との結合も必然的ではない。トリンズムや宗教的無関心や寛容などとも結びついている。所属教して、「経済的発展」は必ずしもカルヴィニズムと 結びつかず、 カ第四章では、ヴェーバーの問題提起自体がそもそも疑問であると第四章では、ヴェーバーの問題提起自体がそもそも疑問であると

事だ、と結論する。

事だ、と結論する。

ないのは奇妙な事だ、と結論する。

ないのいうように単純ではない。事実は 複雑であり、「資本主義の出生証明書は、それを研究する歴史家と同様に多い」のだ。ヴェースーがプロテスタンティズムという特定の要因を他の要因から切離して特に強調し、類似現象との 差異を 誇張するのは、彼の「理念して特に強調し、類似現象との 差異を 誇張するのは、彼の「理念して特に強調し、類似現象との 差異を 誇張するのは、彼の「理念は上で明らかなように、宗教と資本主義精神との関連は、ヴェー以上で明らかなように、宗教と資本主義精神との関連は、ヴェー

#### Ξ

つ。彼のヴェーバー批判は次の三点に要約することが出来る。所在を(サムエルスンの意図に反して!)明確に理解する の に 役 立所在を(サムエルスンの著書は、その歯に衣きせぬ表現によって、問題のサムエルスンの著書は、その歯に衣きせぬ表現によって、問題の

学界展望

- 説」とは結びつかない。ではなく、他の時代の他の教派にも見られ、カルヴァンの「予定がはなく、他の時代の他の教派にも見られ、カルヴァンの「予定約」とかの徳目は、必ずしもプロテスタンティズムに固有のもの() ヴェーバーが「資本主義の精神」としている「勤勉」とか「節()
- とは必然的関連をもつとはいえない。 イズムに親和性を示していない。それ故に、経済発展と宗教倫理れズムに親和性を示していない。それ故に、経済発展と宗教倫理た。また「産業指導者 captains of industry」 はプロテスタンテル域にのみ見られたのではなく、カトリックの地域に も 見 ら れ地域にのみ見られたのではなく、カトリックの地域に も 見 ら れ と 資本主義的」「経済発展」はプロテスタンティズムの弘布した
- 彼の方法的欠陥によるものである。(3) ヴェーバーが意識的に特定の要因のみをとりあげているのは、

グランドと南部などの比較にあらわれている。たとえば、紀カら二〇世紀、北欧と南欧・イベリア半島・東欧、ニュー・インする傾向がある。元来、時間的・段階的にも空間的・地域的にも異った関、連にある事柄を、極めて安易に同質視する方法は、一三世った関、連にある事柄を、極めて安易に同質視する方法は、一三世った関、連にある事柄を、極めて安易に同質視する方法には、特定って考察してみることにする。サムエルスンの研究方法には、特定って考察してみることにする。サムエルスンの研究方法には、特定ってきない。

たこのルネッサンス時代の著作」においては、毛織物業と絹織物基準や 目標としてい」て、「人文主義的都市貴族にあてて書かれ想、祖先への誇りを基にする自負の感情、家族の名誉を決定的な想,在たいる」アルベルティは、「人里はなれた荘園生活 の 理誇りにしている」アルベルティは、「人里はなれた荘園生活 の 理

ランクリン自身の思想およびその構成要素を論じているのではな 流布し、又小市民層のエートスを表現していたからであって、フ の如き――が広く都市および農村の農民・手工業者・小商人層に"The Way to Wealth"や"An Advice to a Young Tradesman" な勤労の倫理が見られるという指摘についても然りである。ヴェ 産階級の大衆にむかって書かれたフランクリンの著作やピューリ 製造の問屋制前貸経営が推賞されている」が、これと「市民的中 いるのは、その著作、 ーバーがフランクリンによって「資本主義の精神」を代表させて というべきである。修道院内部にもピューリタンにおけると同様 タンの論説・説教とを比較」することは、極めて非歴史的である -例えば "Poor Richards' Almanaec" や

ていたのだろうか。以下、 ムエルスンがいうとき、彼はそこでどのような史実を頭にうかべ 「資本主義の発展」、「経済的進歩」、あるいは「経済活動」とサ いささか煩雑にわたるが列挙して見よ

(A) "in certain of the textile districts" (p. 82)

"merchants and manufacturers" (p. 82)

or ironmasters" (p. 83) "extravagant way of life of big merchants, manufacturers

city after anather-Berne, Geneva, Zürich, Amsterdam, werp, London, "the palatical old residence of businessmen in one mercantile Lübeck, Danzig, Stockholm-" Ant-

> chants in England and Netherland" "enormous fortunes of the great manufacturers and

(p. 85) ...in 18th century Holland, or of Morgan, Carnegie, Rockefeller, Vanderbilt and Harriman in 19th century America" "millionaires and multi-millionaires of De Neufvilles, Hopes,

the Hanseatic territories" (p. 103) Flanders; ironfounding, saltdrying and international trade in "textile manufacturing and commerce in the Netherlands and

"great Dutch merchants and industrialists" (p. 104)

lics..." (p. 104) "Many of the largest merchants in Amsterdam were Catho-

"its [Amsterdam] richest inhabitant" (p. 105)

"large merchants and industrial entrepreneurs" (p. 105)

"more prominent man and women" (p. 105)

B "it was amonor than and women" (p. 1 read." (p. 105) "it was among the poorest classes that Calvinism first

of society" (p. 105) "most fanatical Calvinists were drawn ... from the lower strata

"poorer classes of people in Amsterdam and elsewhere ..." (p.

"well-to-do, often of the artisan and trademan class" (p. 115)

"comparatively well-off people skilled in trade and handi-

with well developed communication" (p. 117) "fairly integrated market within a comparatively small area

production" (p. 117) with purchasing power adequate to support industrial 'mass "emergence of a fairly broad 'middle class,' i.e. of groups

般が問題なのではない。史実が複雑なのではなくて、方法が素朴 済活動」の関連についてのヴェーバーの所説はどのように評価さ なのである。 れるかは多言を要しないであろう。「宗教」一般、「経済活動」 である。 しエートスを解明した場合、サムエルスンのいわゆる「宗教と経 を異にする社会層を峻別した上で、彼らに適合的な経済倫理ない ズムの担い手であったことも研究史上明らかである。 歴史的性格 九世紀末以降の独占資本家達が宗教的に無関心であることも当然 宗教に無関心ないし寛容であるのは自明のことであるし、また一 業資本(およびトラフィーク工業資本)家が、カトリック的であり、 握されていることは周知のとおりである。前者すなわち前期的商 社会経済勢力は、近世経済史学上相対立する二つの体系として把とらえられているという点に注意していただきたい。この二つの 的に区別されることなく、ひとしく「経済活動」の担い手としてすなわち、「産業的中産層」「中産的生産者層」とが、質的・範疇 彼らの間にはさまれた「産業的中産層」がピューリタニ

> 題をとりあげて論じていた事は明らかである。 ことはしなかったか、少くともそういう問題意識のもとにこの問るところから推して、ヴェーバーは更にそこ迄研究の手をのばす ムの文化的意義の限度を明らかにすることができる」と述べていたその他の諸要素との関連において、禁欲的プロテスタンティズ ないであろう。こうして、はじめて、近代文化の創出にあずか 義の生成とそれの純粋な功利主義への解体のあとが、歴史的に、後に、中世における世俗内的禁欲の萌芽から発する禁欲的合理主 しかも禁欲的信仰の個々の普及地域に即して、究明されねばなら 神的文化諸財に対する関係が分析さるべきであろう。それから最 合理主義とその生活理想や文化的影響に対する関係、さらに哲学 でなければなるまい。その次には、禁欲的合理主義の人文主義的 的諸共同態の組織と機能のあり方についても、明らかにすること 上ならびに科学上の経験論の発展や技術の発展に対する、また精 内容について、 かを理解しようとしているが、「さらに 進んで 社会政策的倫理のィズムの合理主義的倫理がどの様に、又どれ程影響を与えている ヴェーバー自身は近代西洋文化の特質に禁欲的プロテスタンテ すなわち、私的集会から国家にいたるまでの社会 2

的原理を再び問題としているのではあるまいか。ヴェーバーの研 状況を醒めたる眼をもって見すえ、その極限に於て「カリスマ」 錯・マス化現象=営利の反社会化、 ものではなく、今世紀に入って次第に露わになって来た価値の倒 ヴェーバーの研究は、単に歴史的な因果関係の解明にとどまる 生産(力) 倫理の疎外化という

図に反して証明する以外の意味をもちえないだろう。 ンの近著のようなレベルでの批判は、ヴェーバーの妥当性を、意性を解明しようとする研究として読まるべきである。サムエルス ・ルとして理解し受容れるのも正しくないだろう。近代文化の問題が、単なる歴史学的実証的研究の一つとしてか、文化比較のモデ 究が一面的だとか、 単なる歴史学的実証的研究の一つとしてか、 精神史観だとかいう 類の 批判は 論外で ある

17 16 15 14

Samuelsson, ibid., p. 149. 梶山・大塚訳、下、

二四八一

九頁。

(一九六五・一二・二〇)

Samuelsson, ibid., p.

67.

Ġ

- 注(4) 「マックス・ヴェーバー研究」所収) 丸山真男「戦前における日本の ヴェーバー研究」(大塚久雄編
- 5 5. 1. 梶山力・大塚久雄共訳、「プロテスタンティズムの倫理と資本 主義の精神」 Weber, Max, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, 〕下、二四五—七頁。
- 6 Bendix, Reinhard, Max Weber: An Intellectual Portrait, 1960.
- 7 Samuelsson, Kurt, Ekonomi och Religion, 1957.
- 8 Max Weber. (Harper Torchbooks, The Academy Library, TB 1131), Samuelsson, 1964. Religion and Economic Action: A Critique of
- 研究」第一六巻第四号)二九〇頁注7、二九二頁。 つのマックス・ウェーバー批判-小原敬士「プロテスタンティズムとアメリカ資本主義 -」(一橋大学経済研究所 「経済 ひと
- Samuelsson, op. cit., pp. 1-26.
- Samuelsson, ibid., p. 49.
- Samuelsson, ibid., p. 49.
- Samuelsson, ibid., p. 49.

題調査会で歓談していた。訳本が完成して最初の一冊が届けられた 教授を囲んで親しい日本の人口研究者たちが毎日新聞社人口問

のであろう。 そしてこの訳出が、 後に六年の歳月を経て、漸く訳出されたというこの書にまつわるエ 年の出版までに一〇年を要したトイパー女史の労作であるが、 原著は、連合国軍の日本占領下にあった一九四八年から一九五八のは、まさにその最中であった。 ピソードの数々は、 いかに入念なそれであったかを端的に物語るも いかに原著が綿密な研究によった労作であり、 その

ぎり、 はなかったであろう。 が好んで使うウィットにはちがいないが、しかしこの本に関するか ったろうと解したのは、その場に居合わせたなかのわたくしだけで う」ということであった。こうした外交辞令は洗練された白色人種 一度英訳したら、原著にまさる立派な労作ができあがることでしょ 手にしたとき、 ハウザー教授は日本語を解さないが、しかし訳出されたこの本を ハウザー 教授のこの感想は、ウィットにかこつけた実感であ すかさずもらした率直な 感想は、「この 訳本をもう

学術的に高く評価される背後には、つぎのような事情があったから またその価値が失われることはないであろう。なぜなら、この書が もかわらずにその価値を失ってはいないであろうし、そして将来も 人口)を知るうえでのバイブルであった。そのことは、きっといま リカの人口研究者に とって、 わたくしがアメリカに滯在した 当時 (一九六〇一六一年) に、アメ この原書は 日本(日本の文化・社会と

# 書 評

アイ 毎日新聞社人口問題調査会訳 IJ ン B トイバー著

H 本 0 

Princeton University Press, 1958. Irene B. Taeuber, The Population of Japan,

安 Ш IE, 彬

のは、その後者である。 他は、アイリーン・B・トイバー著、毎日新聞社人口問題調査会訳 南亮三郎他編『人口大事典』(平凡社、一九五七年)の刊行で あり、 『日本の人口』(一九六四年)の出版である。 結集した成果として、われわれが誇りうる労作が二つある。一つは のなかで、人口研究者ならびに人口に心をよせる他の専門家たちを 今次大戦が終結してのちにわが国で刊行された人口研究の出版物 いまここに とりあげる

四年十一月十六日であった。ちょうどその日にはシカゴ大学社会学本書『日本の人口』の訳本ができあがったのは、正確には一九六 部長ハウザー (Philip M. Hauser)教授が来日された機会をとらえ